

「生命の教育」創始者 谷口雅春先生 今月の言葉

# 子供は無限の可能性に満ちあふれている

明るい面のみを見る習慣を

多くの人たちは自分自身の生活習慣そのものによって、自分の生命の伸びる力に堰せきをしている人たちが多いのであります。まずその一つは消極的な悲観的な物の暗い面を考える考え方です。石橋をたたいて渡るといって確実性は必要であります。それが病的になってしまつて「何か悪いことがおこるかもしれない」と不安であらゆる出来事を打診しているような心の状態になってしまつては、その人は伸びることができないのであります。吾々われわれ

は物の暗い半分を必ず見る習慣をすてて、明るい面のみを見て前進する習慣をつけなければなりません。

（新装新版「生活読本」233頁）

親の尺度で子供をはかつてはならない

子供を育てて行く上に於おいて、先まず心得ておかなければならないのは人間は皆みな一様いちようのものでないことであります。天分てんぶんも異ちがえば過去の念の集積しゅうかくも異ちがう。吾々われわれは過去何十回百回と生うまれ更かつてこの世に出て来ているのであつて、その間に色々の体験を積み、色々の過去を持つてい

るのであります。だから双生児で生れた子供でも、同じ環境で、同じ人が同じ食物で同じ教育法で育ててもすっかり性質が異うことがあるのであります。ですから、子供をよくしようと思う時に、大人の、しかも自分だけの尺度でもって判断しすぎて善悪を評価するといけないのであります。人間というものは皆個性が異う。個性が異うところにそこに価値がある。桜の花と薔薇の花とはどちらが美しいかという、これは評者の好き嫌いで定まるので、桜が一層美しいという人もあれば、薔薇が一層美しいという人もあります。それを自分だけの好き嫌いでもって、「お前桜のように、そんなに一晚で散るような淋しい姿じゃいかん。薔薇の花のようにならねばいかん」といったところが、それは出来ない事を望むのであります。桜は桜でその良さを認め、薔薇は薔薇でその良さを認めなければならぬのであります。人を教育するには自分が「こう有りたい」という一つの尺度をもって、その尺度に異うものは皆悪いと考え、お前は悪い悪いという批評を加えて行きますと、その批評の言葉の力によ

って、その児童の天分は伸びず、「僕は悪いものだ、劣等児だ」という観念を心に植えつけられて、ついに折角の天才児も一個の劣等児になってしまふのであります。

（新編『生命の真相』第47巻129～130頁）

### 子供の内部には無限の生命が宿っている

人間の内には実に無限の潜在能力が埋蔵せられているのである。深く穿つに従ってどれだけでも豊かにその潜在能力を掘り出すことが出来るのである。穿つとは自覚するということである。自覚しさえすれば埋蔵せる宝は常に掌中のものとなるのである。だから表面にある能力だけを自分の全部だと子供に思わすな。表面にある「自分」は「真の自分」の唯の「小出し」にしか過ぎないことを知らせよ。「小出し」は使うのに便利かもしれないが、この「小出し」を自分の全部だと思ってしまうたならば大いなる発達は望めないのである。常に子供に教えて小成に安んずるといえ。小成は自分

の「小出し」に過ぎないこと、今ある彼の能力はすべて「小出し」に過ぎないこと、「小出し」は決して誇るに足りないこと、つねに「小出し」に満足せず、本源、即ち無限の潜在能力(神)より汲むように努力すること——常にかくの如き真理を子供に解る言葉で教えるように心懸ければ、現在の自分に満足する子供の傲慢心は打砕かれ、驕傲は消滅せしめられ、永遠に能力の伸びる精神的基礎は築かれるのである。自分の内部の生命が無限の大生命に連つており、そこに自分の本当の宝が在るのだということが判るとき、いま僅かに掘り出した能力の「小出し」位に傲慢になっていることは出来なくならざるを得ないのである。

(新編『生命の真相』第22巻159～160頁)

子供にある無限の能力を發揮させましょう

「無限の自己」——これを真如とも、法性とも、自性とも、仏性とも、実相とも、「本来の面目」とも、「自

己に宿るキリスト」とも、「彦(日子)又は姫(日女)としての自己の本質」ともいうのである。しかしかくの如き言を解せぬ幼き子供に対しては、「人間は神の子だ。子の顔が親の顔に似ているように、汝の能力と性質とは神の姿に肖せてつくられているのだ。神はこの世界の万物をつくられたのであって、人間は神の子として、神の無限に大きな能力のあとつぎに造られているのだ、だから神の子は神の子らしく生きねばならぬ。神から譲られている無限に大きな能力を発現しようと思わないものは、親から折角頂いた宝の庫を開かないで棄ててしまうものだ」こういう意味の話を時々言葉を変えて子供に話して聞かせることにして、人間の本性の尊いこと、その潜在能力の無限であることを子供の心に吹き込むようにすれば好いのである。すると、子供は次第に「本当の自分」が如何に崇高く靈妙なものであるかを知り始める。

(新編『生命の真相』第22巻161～162頁)